

2026年度入学試験（7月）
大学院デザイン工学研究科

建築学専攻 修士課程
キャリア3年コース

入学試験問題・解答用紙

[小論文]

2025年7月5日（土）
9：30～12：30

＜解答要領＞

1. 解答は、問題用紙の解答記入欄にすること。
2. 問題用紙（解答用紙）のすべてに、受験番号と氏名を記入すること。また、表紙右下に受験番号を記入すること。
3. 参照はすべて不可とする。
4. 問題用紙（解答用紙）はすべて提出すること。
5. 別途配付する計算用紙は提出不要。

受験番号	
氏名	

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (1 枚目／3 枚中)	建築学専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

設問 以下の文章を読んで、その後の問に答えなさい。

従来、都市における聖なる場は、宗教的な意味合いをともなって成立するのが普通である。水辺の場合もまた、禊や沐浴、安全や豊漁の祈願などの行為は、日常・非日常を問わず、願いを宗教上の体系に結び付けて、その行動のひとつとして具象化したものといえる。もっとも、まず宗教化することで、儀式の正当化を目的とするケースも多い。たとえば、天災や雨乞い、溺死など非業の死がたたりや呪いなどに結び付けられ、それに対する畏怖の念から水神を祀り宗教化するのである。中国の浙江省でよく見られる洞窟祭祀などはその典型的な例で、湧水をたたえる穴こそがあの世とこの世をつなぐ出入口であり、蛇や龍を象徴として形象化させる。他にも、韓国公州西穴寺の祭壇水場や長野飯山小菅神社の甘露水など、日本を含むアジアにはそうした水の聖地が実に多い。

(中略)

そして、アジアや日本ではそうして作られた山や川といった地形の大きな枠組みが、有機的な関係を結びながら独自の空間秩序を生み出した。水に寄り添って暮らすことの意義を重視する人々は、作られた地形によって常に危険にさらされる環境にあることをよく知っていた。だからこそ、水都には、その成立段階から、水の都市や周辺の地域そのものが備える特性によって、すでに人為的な災害が直接的あるいは間接的な要素として内包されていることになる。

(高村雅彦「水辺文化の原点を探る」、陣内秀信・高村雅彦『水都学Ⅳ 水都学の方法を探って』法政大学出版局、2015 年より抜粋)

問 1 文章の「水の都市や周辺の地域そのものが備える特性によって、すでに人為的な災害が直接的あるいは間接的な要素として内包されていることになる」を具体的に説明しなさい。

出題の意図

建築学に触れたことのないキャリア 3 年コースの受験生に対して、合格後に主に習得する工学の視点からではなく、むしろ現時点での人文社会学を含めた観点から都市や建築をいかに考えているかを問うたものである。問題の設定に対し、一般的に、これまでいかなる洞察力のもとに都市や建築、人間の生活を考えてきたかを論じてもらい、その深さや的確性を評価する問いとなる。

解答例

この設問は、水辺に都市や建築が成立した最初期の段階においてすでに、洪水などの自然災害だけでなく、人間が理想とする、いわば都合のいいように、人工的な開発によって自然地形を変えてきたという点で、危機がもともと内包されているということを歴史的な数々の災害事例がそれを示している。

人間は、単に水を得るという機能の面だけでなく、常に水に恐怖を感じて信仰の気持ちを育み、畏敬の念をもって接する気持ちが生まれたために、むしろ水のそばに立地することを求めた。そうした聖なる場所では、日常的に人々が沐浴し、死者を茶毘に付して川に流す儀礼や神像を入水させる伝統行事が行われ、水がもつ神聖さを直接身体で実感する文化が長い時間をかけて蓄積された。つまり、アジアでは舟運や用水といった機能面のみならず、人々が水に寄り添って暮らすことの意義のほうに実が大きい。だからこそ、常に危険にさらされる環境にあることを人々は身をもって知っている。眺めるだけの景観へと意味を変え、防災を重視するようになった近代を経てもなお、豊かな水の空間とそれを享受する人々の生活がアジアで見られるのは、そこに理由がある。

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (2 枚目／3 枚中)	建築学専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

問2 ここ数年、アジアの多くの都市では、それまでに経験したことのないような自然災害にみまわれている。異常気象や大規模地震は、人口の急激な増加と密集が顕著なアジアの都市部にあっては、より被害が甚大になる。これらの災害でとりわけ問題となったのは水である。人口の規模が桁で異なるアジアでは、ひとたび災害が発生すると、その被害も甚大なのである。2012 年の世界銀行の発表では、世界の総水害件数の約 4 割をアジアが占め、水害のリスクにさらされている人々のうち 9 割以上がアジアで暮らしているという。いま、アジアでは、人類が地球の自然といかに共生しながら生きていくべきか、それを根底から考えなおさなければならない時期に来ている。いざという時にもコントロールできていたはずの水が、人間の予想や科学技術の域を超えて多くを破壊し人命を奪う。世界の人口の 6 割が密集するアジアでは、21 世紀に課せられたもっとも重要な課題であろう。

そこで、設問の文章は、こうした問題といかなる関係があり、課題の解決のためにどのような提案がありうるのか、具体的に論じなさい。

試 験 科 目	専 攻	参照	電卓	受 験 番 号				
小 論 文 (3 枚目／3 枚中)	建築学専攻	不可	不可					
				氏 名				

※参照可の場合（ ）

(2 枚目の続き)

出題の意図
設問の文章で強調する水の都市が内包する人文社会的な本質とは別に、20 世紀以降の科学技術、とくに工学がそれを意識せず、無視したままで、まったく無縁に開発を推し進めてきたという関係のなかで、人間・自然・科学技術の相互の在り方を見直さなければならないことを自覚させられた現在、それらのよりよい併存はいかにあるべきかを多様な想像力と説得力のもとに提案できるかを評価する問いとなる。

解答例
アジアの多くの水都では、あらゆる条件下で、常に水害のリスクにさらされているのであれば、人々はその時々の状況に応じて対処するしか方法はない。近代の技術で対抗することができないほどの自然が、都市と人々を取り巻いている。元来、リスクは不可避のものであり、それを受け取らなければ、そこに長く留まり、人間の活動を継続することなどできない。減らす努力はしても、絶対になくならないのであれば、反対に完全と思い込んだ防御は人間の過信を生み、災害後の対処を遅らせる。これも都市と水の関係の一つであり、その考え方はアジアではむしろ歴史の中で着実に培われてきた。そして、都市の水害に対しては、科学技術を介入させてそれを防ぐのではなく、水の信仰の不変性と一体感を普遍のものとする身体性こそが、一時の災害の苦難よりも上回り、相互に作用する結果となっている。この状況と思考は、一方的に発展や開発を推進してきた都市とは違って、災害による破壊ののちの再生に対して、新たな概念を持ち込まずに、粛々と同じことを繰り返すという哲学にも似た強い基軸となって常に存在してきたことを同時に表している。